こどもの『死者の書』
—渡りくる夕日とむすばれるための一小節—

キーワード：夕日、『死者の書』、基層教育学

九州国際大学付属高等学校　　秦　恭子

1、炉端の夢想—Prologue

はじめて溶鉱炉の火をみたのは、いくつのときだったろう。父の勤めていた製鉄工場をたずねたのであるが、鉄柵をにぎる手がずいぶんと小さかった記憶があるから、きっとまだほんとうにおさないこどものころのことだったと思う。そのときわたしは、もえさかる溶鉱炉の前でしばらく身動きすることができなかった。それは美しくてかなしくて、ただひたすらな経験だった。わけもわからずカッと昂ぶって、ひとりでに目がぬれてこまってしまったのをおぼえている。なみだで輪郭のとけた景色のなかに、炉の色はいっそう光りを放った。そして気をうしなってしまいそうな中に「あぁ、ここから生まれた。」とだけおもった。

溶鉱炉の火。それはわたしにとって始原の火であったとおもう。あのかなしさ、うつくしさ。なみだの艶にいっそう光ったくるおしさ。わたしはこわれそうだった。いたいような安心が熔岩のようにからだを割って、ながれてつつみ、気がとおのいていくようにおもった。ふしぎな象形。そのさまはむねの内ふかく、たいせつに埋めこまれた生きものの心臓のようにも思え、はるかの果て、いのちの核、ふたたび溶けこんでゆきたい、母胎のいろとも思えたのだった。そうしてふしぎに、そのときすでにわたしは夕日をみていた。夕日とはっきり向かいあう、あの瞬間にいだくむねの熱。それとおなじものが燃え、ほのおにつつまれているように感じていた。

炉と夕日。とおい出生の記憶。そのつらなり、重なり。あの日幼いからだをつらぬいたイマジネーションを、円かなまま重層のまま、ここに伝えるすべはないものか。この拙いことばに託すより、もっとずっとよいすべは…、考えたわたしは、まずこころみに、ふたつの作品をとりあげてみることにした。

…

「明確につかめない、夢みたいの、本能みたいの、赤ん坊の時から背すじのあたりにもっている記憶みたいなもの、そんな世界を出来たら追ってみたいとおもいます。」[1]そう語って、こどもの世界を描きつづけた谷内六郎。ひとつめの作品は、彼の遺した「西陽が火を入れる廃屋のカジヤ」という絵画である。

(谷内六郎「西陽が火を入れる廃屋のカジヤ」)[2]

ここに自転車の「坊や」の目をとおして描かれる夕日は、いままさにしずみ、終わっていこうとする日であり、また同時に鍛冶屋に生命の火をいれる始まりの日でもある。烏の漆黒と夕日の唐紅。死のにおいと生の予感のたちこめる、そのあやしいうつくしさに、「坊や」は安心なような不安なような、うれしいようなこわいような変なこころもちになって動けなくなっているのだろう。「坊や」のうしろ姿に、かつて溶鉱炉のまえにうごけなくなった幼いじぶんが重なってゆく一枚の絵である。

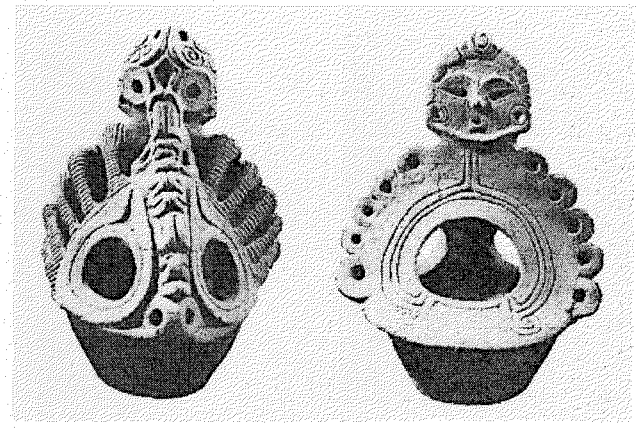
…

もうひとつの作品は、５千年前にわたしたちの祖

[1] 谷内六郎(1982)『谷内六郎展覧会　冬・新年』新潮社、p.86

[2]横尾忠則編(1981)『谷内六郎絵本歳時記』新潮社

々によって遺されていたもの。現代の先鋭的な考古学者たちに「イザナミ」と名づけられている長野県曽利遺跡出土の「人面香炉形土器」である。



(長野県曽利遺跡「人面香炉形土器」井戸尻考古館蔵)

ふくふくと、ふくよかにふくらむからだ。ほぅとあどけなく無垢な顔。まるいおだやかな波立ち、水紋の様な肩とうで。小さくあいた口からはまた、ぽこんぽこんとまんまるあぶくの吐息がはかれる。やわらかなおなかに抱いた穴には、夜になるとあたたかな火が宿る。なんとかわいらしい、まどかな女性。円熟のはての幼女のきよさ。彼女を「イザナミ」と呼んだ考古学者たちは、そのすがたについてこんな風に語っている。

浅い鉢を天蓋状の造形でおおい、片側に大きな窓、反対側には二つの窓や透し孔を設けた、まるで香炉のような土器。通常の土器の概念をこえた形態であり、神聖な火を燈す火器と目される。…略…土器本体が女神の胎内に見立てられる。正面の大きな円窓は、別な土器像によって蛙の背であり、女性の陰部を表すことが知られる。そこから火が発する。[1]

この土器はそれ自体が女性の胎内。おなかに抱いた円窓は、新しい生命がかおをだす、まさにその穴なのである。そこに神聖の火が点される。それはすなわち受胎を意味するだろう。あたらしい生命をおなかに宿して、彼女のかおはますます無我へとときはなたれる。

しかしそのふんわりとやわらかな女性のすがたは、裏をかえせばメドゥーサのごとく死のにおいをたたえた恐ろしいがいこつとなる。ゆらめく無数の蛇の髪、からみつき引き込む渦の髪。洞窟のように暗い穴、その両眼に火が燃える。

まるく、まるい、生成のちから。うねり、うねる死のちから。それら背反するイマジネーションは表裏一体の造形をもって、ここにみごとにひとつに成っている。「イザナミ」と名づけられた由縁である。わたしが願っていた表現は、５千年まえのひとびとによってすでに完璧なかたちで遺されていたということになる。

「イザナミ」のすがたをみつめていると、しぜん円窓に幻想の火がともる。その火はすぐに、おさない胸にやきついた製鉄炉の幻影へとつながり、大きな音響とともにすべりおちてくるまっ赤な鉄のかたまりの空想へと結ばれてゆく。それは産声あげてうまれる赤子をおもわせ、またふしぎに、夕日のはなつ力とも相似している。

火と溶銑と赤子と母の血、その熱、その力。それらすべての重なるところに夕日はぽっかりと口をあけ、燃えたち、ねじこまれてゆく。おわる力と始まる力。そのいづれをも最大に表現しながら、夕日はおち、籠もってゆく。せかいはみるみるみなぎって、草木が、大地が、身ごもりそして夜がくる。

…

母国語は生命と直結する。それゆえ母国語の教育にとって、この重層的イマジネーションの追究はたいせつである。それは、この幾重にも折りたたまれてたっぷりと重量をなす夕日のイマジネーションは、わたしたちの生命の根源、つまり生と死をめぐるふかい夢想そのものであるためである。生のきわみに燃えおこる死と、炎上する死のさなかからむくむくと萌芽する生。夕日はその bi-logical なイマジネーションをはげしく同居させ、わたしたちの生命をゆさぶり、溶かし、きよめてしまうのだ。

母国語は生命活動とともにある。とすればその教育はとうぜん、生命そのものをじっとみつめるものになるだろう。わたしはここに夕日の呼びおこすイマジネーションをみつめ、生命活動の根源のありようを、その生と死の抱きあう領域をふかくのぞいてみたいとおもう。

そんなことをことさらに考えるのは、わたしが次のような語りと心を一にしているからである。

[1] 富士見町井戸尻考古館(2006)『井戸尻　第８集』鬼灯書籍 pp.56-57

近代に入って、特に敗戦直後、一夜にして、我々は個人の生命を単位とすることを常識化する教育は徹底を極めた。…略…すでに、あれほど大切にした「家」は生滅していた。神仏も美術品でしかなかった。日本人は生命の拠り所を失ったのではないか。…略…基督教徒には「愛」がある。いまの日本人には何があるのか。かつての「義理」も「人情」もない。ましてや「武士道」があるはずもない。生命の基層部は全く空洞化していたのである。

教育学は何のために存在するのか。人間生命の基層を対象とせぬ教育学に人々の関心が向けられようがない。…略…親から子へ、子から親への、個人を超える継承的生命を思わない限り、日本人の生命観は衰耗し破綻する。[1]

このことばは、生命の基層を対象とする教育学、すなわち「基層教育学」を提言した上原輝男のものである。「生命の基層部」、「個人を超える継承的生命」。それはとおい祖々の間に永い時間をかけてつちかわれ、持ち伝えられてきた生命観。あるいはこころの淵に伝えられている、民俗の心性といってもいい。[2]

「教育は投薬ではない。それは生まれ出た人の子が、人の心を獲得していく過程を保証することである。」とかつて上原は書いたが、生命をはぐくむとは、こどもたちを「生命の基層部」たるその心性へ、「個人を超える継承的生命」すなわち人類普遍の生命観、そのイマジネーションへと結んであげることであろうとおもう。

それは云いかえるなら、わたしたちの教育は、こどもひとりの存在のうちに郷土の地平をひらいてあげねばならないということである。郷土。ふるさと。ひとついのちが蘇生する場処。ふかく休み、元気をとりもどすことができる場処である。それをことばのうちに、そのむこうに、ひらいて渡してあげたい。どんなにひとりぼっちのときも、さみしくないように。どんないかりのときにも、しずめられてゆくように。どんなかなしみのときにも、なぐさめられてゆくように。すべてのいのち、こころの普遍へと、結ばれてゆくように。そして何時のときも、その淵からたくましくよみがえってゆけるように。

存在の井戸たる生命の基層部。そのおおくがただの空洞と化し、また埋め立てられてしまったことはかなしい。しかしその断たれた垂直の水路は、それをふかく希う人びとによって、ふたたび豊かな水脈をむすんでいる。のこされた井戸にしずみ、もいちど水をよばうこころみ。わたしの知ったものをふたつ、ここに示したいとおもう。

2、よみがえる原初の夕日

2の1、折口信夫『死者の書』

去年の春分の日の事であった。入り日の光りをまともに受けて、姫は正座して、西に向つて居た。日は、此屋敷からは、稍坤によつた遠い山の端に沈むのである。西空の棚雲の紫に輝く上で、落日は俄に転き出した。その速さ。雲は炎になつた。日は黄金の丸になつて、その音も聞えるか、と思ふほど鋭く廻つた。雲の底から立ち昇る青い光りの風――、姫は、ぢつと見つめて居た。やがて、あらゆる光りは薄れて、雲は霽れた。夕闇の上に、目を疑ふほど、あざやかに見えた山の姿。二上山である。その二つの峰の間に、ありありと荘厳な人の俤が、瞬間顕れて消えた。後は、真暗な闇の空である。山の端も、雲も何もない方に、目を凝して、何時までも端座して居た。[3]

これは折口信夫『死者の書』の一節。女主人公・藤原南家郎女が、二上山にしずむ夕日にはじめて俤人の幻想をみた、まさにその場面をえがいたものである。

ときは奈良朝。父から贈られた称讃浄土仏摂受経の手写を日々一心につづけていた藤原南家の姫君・郎女は、ある春分の日、二上山にしずむ夕日のうちに「荘厳な人の俤」をみる。半年ののち、秋の彼岸の中日にも、又。そしてさらに半年のちの春、春分の日。ついに郎女は千部手写をはたして筆をおく。と、にわかに雨。しとしととしたたる音。恋こがれた俤を二上山に見ぬまま、夜は無情に姫のうえに降

[1] 上原輝男編著(1993)『いのちの教育を再び～基層教育学試論集～』pp.3-4

[2] それは柳田国男、折口信夫の両氏によって「心意伝承」と名づけられたものである。上原は國學院大學在学中に折口に師事し、「心意伝承研究」を継いだ人物であった。

[3] 折口信夫(1974)『死者の書』中央公論社、pp.53-54

りてくる。茫然自失となった郎女は、俤人をもとめるあまり、「おびかれ出る」ようにして、その夜のうちに奈良の屋敷を二上山へむけて出てゆくのである。

…

夕日は出あいがしらに人をつかむ。胸郭をみたす。そこに居るのにとどかなくて、それでいてこんなにたしかに抱きとめられている、そのせつなさ、うっとりとしたよろこび。あたたかくつつまれているのに、尚とおく、尚はるかな、とうとい光り。

夕日にみた俤人にたましいを奪われ、みずからのたましいを追いかけるようにして夕日のしずむ二上山へとおびかれてゆく郎女。この世ならぬもの、死者への恋。その想いはくるおしく、またすきとおって、かなしい。郎女のこころはその底をやぶって、いま渡りくる夕日、その永遠のひかりの懐へと走りはじめたのだ。

四天王寺西門は、昔から謂はれてゐる、極楽東門に向かつてゐるところで、彼岸の夕、西の方海遠く入る日を拝む人の群集したこと、凡七百年ほどの歴史を経て、今も尚若干の人々は、淡路の島は愚か、海の波すら見えぬ、煤ふる西の宮に向かって、くるめき入る日を見送りに出る。…略…しかも尚、四天王寺には、古くは、日想観往生と謂はれる風習があって、多くの篤信者の魂が、西方の波にあくがれて海深く沈んで行つたのであつた。熊野では、これと同じ事を、普陀落渡海と言うた。観音の浄土に往生する意味であつて、淼々たる海波を漕ぎゝつて到り著く、と信じてゐたのがあはれである。…略…そこまで信仰におひつめられたと言ふよりも寧、自ら霊のよるべをつきとめて、そこに立ち到つたのだと言ふ外はない。さう言うことが出来るほど、彼岸の中日は、まるで何かを思ひつめ、何かに誘かれたやうになつて、大空の日を追うて歩いた人たちがあつたものである。[1]

これは『死者の書』をふかく読むのに欠くことのできない折口の論文『山越しの阿弥陀の画因』の一節である。折口はここで、四天王寺や熊野の地に伝わる夕日をめぐる信仰、日想観往生や普陀落渡海の風習にしたがい西海ふかくにしずんでいったいにしえの人びとについて語っている。「そこまで信仰におひつめられたと言ふよりも寧、自ら霊のよるべをつきとめて、そこに立ち到つたのだと言ふ外はない」。しずむ夕日にみた俤人にみちびかれた郎女のひたすらな旅もまた、ここに重ねられる類のものであろう。

夕日は一この巨大な魂、すべてたましいの母胎である。だから郎女が夕日を追いかけるとき、それは「追いかけて」ゆくようであって、そのじつ大きなふるさと、おのが存在のよるべへと帰還しているのではないか。

『山越しの阿弥陀の画因』は「渡来文化が、渡来当時の姿をさながら持ち伝えていると思われながら、いつか内容は、我が国生得のものと入りかわつている。さうした例の一つとして、日本人の考へた山越しの阿弥陀像の由来と、之が書きたくなつた、私一個の事情をこゝに書きつける。」[2]として語りはじめられる。そのなかで折口は、『死者の書』は「謂はゞ、一つの山越しの弥陀をめぐる小説、といつてもよい作物」[3]といい、「山越しの弥陀像や、彼岸中日の日想観の風習が、日本固有のものとして、深く仏者の懐に採り入れられて来たことが、ちつとでも訣つて貰へれば、と考へてゐた」[4]と語っている。ここに郎女の旅の起源は、さらにふるくまたふかく、ひらかれてゆくのである。

此やうに、幾百年とも知れぬ昔から、日を逐うて西に走せ、終に西山・西海の雲居に沈むに到つて、之を礼拝して見送つたわが国の韋提希婦人が、幾万人あつたやら、想像に能はぬ、永い昔である。此風が仏者の説くところに習合せられ、新しい衣を装ふに到ると、其処にわが国での日想観の様式は現れて来ねばならぬ訣である。

日想観の内容が分化して、四天王寺専有の風と見なされるやうになつた為、日想観に最適切な西の海に入る日を拝むことになつたのだが、依然として、太古のまゝの野山を馳せまはる女性にとつては、唯東に昇り、西に没する日があるばかりである。だから日想観に合理化せられる世になれば、此記憶は自らが範囲を拡げて、男性たちの想像の世界にも、入

[1] 折口信夫(1968)『折口信夫全集　第二十七巻』中央公論社、p.184

[2] 1に同じ。 p.174

[3] 1に同じ。 p.179

[4] 1に同じ。 pp.183-184

りこんで来る。さうした処に初めて、山越し像の画因は成立するのである。[1]

日本の風土には、仏教渡来のはるか以前から、人びとのあいだにもち伝えられてきた日を追う風習、土地によっては「日の伴」とよばれた、日を拝み日を送る風習があったという。仏教文化のたまものと思われがちな山越しの阿弥陀像や彼岸中日の日想観の風習が、じつは仏教以前、その地にはるか古よりうけ継がれてきた風習の延長上に生じたものであるということを、折口は『死者の書』をつうじて描き出そうとしたのである。

(冷泉為恭筆「阿弥陀来迎図」大倉集古館蔵)

『死者の書』の女主人公・藤原南家郎女は、現在の奈良県葛城市の当麻寺に伝わる中将姫伝説を直接のモデルとして描かれたといわれている。しかし実際には折口は、天平の世に生きた中将姫よりもさらに奥ふかい来歴を、彼女にあたえようとしていたことがわかる。

昔と言うばかりで、何時と時をさすことは出来ぬが、何か、春と秋との真中頃に、日祀をする風習が行われていて、日の出から日の入りまで、日を迎え、日を送り、又日かげと共に歩み、日かげと共に憩う信仰があつたことだけは、確かでもあり又事実でもあつた。…略…何の訣とも知らず、社日や、彼岸には、女がこう言う行の様なことをした。又現に、してもいるのである。[2]

夕日を恋う郎女の鼓動。その起源はじつに古いものであった。幾百年とも知れぬ古代の女人たちから伝うたましいの旅。郎女を夕日へとつき動かすのは、人類のそうした息の永い記憶であるといえるのである。『山越しの阿弥陀の画因』は、こう結ばれておわる。

私の女主人公南家藤原郎女の、幾度か見た二上山の幻影は、古人相共に見、又僧都一人の、之を具象せしめた古代の幻想であった。さうして又、仏教以前から、我々祖先の間に持ち伝へられた日の光の凝り成して、更にはなばなと輝き出た姿であつたのだ、とも謂はれるのである。[3]

春、ほのぼのとやわらかな青ぞらの下、むつまじくより添う二上山の男嶽と女嶽。雨夜の旅のすえに二上山にのぞむ当麻寺へたどりついた郎女は、寺の禁ををおかした咎をつぐないつつも、いっそうの想いで俤人をまちつづける。ひたむきな恋にいよいよ浄化してゆく郎女の、そのすきとおるこころ。そこに映る夕日の世界は、仏教伝来の世に、郎女というひとりのうつくしい女人のうちに結実した、人類の夕日の新しいすがたであったのである。『死者の書』はまさに、夕日をめぐる信仰の、その継承と飛躍の瞬間を写しとった珠玉の小説といえるのだろう。[4]

2の2、こどもの『死者の書』

月日はたち、郎女の生きた時代、そして郎女を描き出した折口信夫の生きた時代も、すでにとおく去

[1]折口信夫(1968)『折口信夫全集　第二十七巻』中央公論社、p.196

[2]折口信夫(1968)『折口信夫全集　第二十七巻』中央公論社、p.185

[3] 1に同じ。p.198

[4] 小説『死者の書』における折口信夫のこころみについては、中沢新一(2008)『古代から来た未来人　折口信夫』に詳しく記されている。

ってしまった。人々はただ慌ただしく暮らし、夕日の力をかえりみることもない。もうこの世界には、彼らほどに澄んだこころで夕日をみつめることのできる者は絶えてしまったのではないか。ふと、そんな気にかられて、こわいような気持ちになることがある。それは腹の底をぬかれるようなおそろしさ。へその緒を失った胎児のおののきである。

しかし、夕日の水脈はかわらず流れ、わたしたちの深層に伝っている。めまぐるしい日常にいのちを摩耗するわたしたちには、たとえそれが感じられなくなっていたとしても。夕日は伝う。伝いつづける。それを教えてくれるのは、今を生きるこどもたちである。夕日を追い、拝み、そこに安息をみいだした遠いいにしえ人の記憶。こどものうちには、それがはっきりと伝い、太い水脈をむすんでいる。

こどもたちは夕日を謳う。

…

「夕日が好きです。夕日の中へかけこんでいきたいです。」

…

「あの夕日につっこんでみたい。」

…

「夕日は、ゆめのかなたのように本当にきれいな色に光るので、その中へ走っていきたいような気持ちになります。」

…

「夕日を見ると心がすいとられそうでずーっとする。」

…

「夕日を見ていると体がゆらゆらしてきてすいこまれそうになります。」

…

「‘夕日’と聞いて、いま心のなかにひろがった思いをそのまま書いてください。」そう投げかけられて、こどもたちはすぐさまこのように書きつけたのだという。[1]ここにわたしたちは、なお生き生きと現動する『死者の書』の女主人公・郎女のこころをみつけ、胸のあつくなるのをおぼえる。いわばこれらのことばは、こどもの書いた『死者の書』ということになるだろう。

わたしたちはこれから、こどものことばに手を引かれ、夕日のもつ原初の力を思いだしてゆきたいと思う。思いだすとは心にとりもどすことである。こどもたちのことばは、単にわたしたちの人生の過去に属するものではない。わたしたち大人は、失ってゆくばかりではいけないのである。「無意識の深層にまで降りゆき、詩人と共に原初の夢を見出してごらんなさい。」とバシュラールはいう。そのようにしてこどものことばに身を委ね、あるいはその「詩的瞬間」に現在するとき、それらはただちに過去であることを止め、まさにこの現存在の深部で振動しはじめる。こどもたちのことばに導かれて歩む旅のはてに、わたしたちはきっと原初の夕日がみずからのうちにふたたび大きく呼吸しはじめるのを、感じてゆくことになるだろう。

…

「きれいな夕日。夕日を見ていると、自分まで夕日になってしまう気がする。ほら！足の方からオレンジになってきた。わっ！もうからだがうすーいオレンジだっ！足の下の方からだんだんこくなってきている。ういてきた！いっしょに夕日になっちゃうよ！そんな気がしてくる。あっ！」

…

いっしょに夕日になってしまう。なんと大きな感覚で、こどもは夕日を浴びるのだろう。夕日そのものに変容してゆく身体。オレンジいろに染まり、透けてゆく身体。この世からはがれてゆく身体。そのイマジネーションにかれらはいかにも楽しげに身をゆだね、みつめている。こどもはその軽いからだを、容易に夕日に投げ渡し、明け渡し、夕日とひとつになろうとするのである。

…

「ちっちゃいころのゆめは夕日をつかまえて、夕日をさわりたいとおもっていた。でも夕日はざんねんながらさわれない。…略…６才になって夕日をおぼえてじぶんがバカとおもった。なぜかというと虫のあみで夕日をおいかけたとか。もう６才になったら、夕日は見るだけとわかったから、もうやりません。夕日づかみは４才までやっていた。でももう６才だからやりません７才になってはじめて夕日がきれいなことがわかりました。」

---

[1] 本節にとりあげるすべてのことばは、児童の言語生態研究会・小林照子による報告「子どもの感情生活における浄化作用について―『夕日』作文にみる子どものイメージ運動」(児童の言語生態研究会編『児童の言語生態研究№13　特集・子どもの泣き』1988)にとりあげられた、小学生のこどもたちのものである。

…

こどもと夕日は直にむすばれる。そこにことばの介在はいらない。幼いこどもにとって夕日は「見るだけ」の対象ではなく、「きれい」と鑑賞するものでもないのだ。「7才になってはじめて夕日がきれいなことがわかりました」。つまり「きれい」というそのことば以前にすでに夕日は、こどもたちにとってさわりたい、つかまえたい、飛びついて一つになりたいという、つよい衝動をおぼえるような存在なのである。

…

「わたしが夕日にすいこまれそう。一ど夕日にすんでみたいな。それはゆめだけど。」

…

「私は夕日をみると、自分までまっかなほのおの中にいるような感じがします。夕日は私のようふくの色をオレンジ色にそめてしまい、かお、かみの毛までオレンジ色にそめてしまいます。そのときは、『やった。夕日の中に入れた。』とかんじてしまいます。…略…たいようよりきれいだなぁと思います。いつか夕日に入りたいなぁ。」

…

夕日に入りたい、住みたいとこどもたちはねがう。かれらは夕日を、日常の空の延長にのっぺりと広がる絵画、平たい映像世界としてではなく、この世のはてに口を空けた別世界として認識する。それは「たいようよりきれい」で、みつめていると「すいこまれそう」な「まっかなほのお」の穴なのである。

…

「夕日を見るとわたしは不思議な世界に入っているような気がする。まっ赤な色。ふしぎな色。美しい色。こんな色が私をふしぎな世界に入れてくれる。」

…

「夕日を見ていると、からだがぽっとあつくなってしまいます。それでじぶんがこの世界にいないのだとおもってしまいます。」

…

「まっ赤な色。ふしぎな色。美しい色。」。そうとしかいえない夕日の色は、わたしたちをつつみ、「ぽっと」点火し、「ここ」から蒸発させてしまう。それは色の力であるとこどもは語る。「こんな色が私をふしぎな世界に入れてくれる」。

夕日に色づけられたからだはもはやこの世のものではない。それゆえわたしたちは、「じぶんがこの世界にいないのだとおもって」しまうのである。わたしたちは夕日のなかにただ淡い影ぼうしとなって佇む。この世に身を置きながらとおくなる。とおくなりながらこの世をじっとみつめている。まるでじぶんが生きながらにしてあの世からの眼差しそのものになってしまったような、それはほんとうにふしぎな感覚である。夕日の色に染まった時間、わたしたちはいったいどこにいるのだろう。

…

「夕日を見るとぼくはポカーンとつったったまま、『きれいだなぁ、青春というのはすばらしいものだ。』とバカげたことをいいます。あと、自分が自由になった気持ちになってしまいます。空を飛びたくなったり、もうちがう国のハワイにいる感じがして楽しくなったりします。夕日を見るときはいつもそう想います。夕日が上がると、なにかかならず楽しいことやいろいろ思いだすので、夕日というのは人をなにかの空間にさそいこむと思いました。」

…

夕日を「ポカーン」とみているこどもの心は、こんなにも羽ばたいている。「青春」、その切ない情熱の時を、「バカげたこと」と思いつつも、かれは夕日にみるのである。自由。飛ぶ。「もうちがう国のハワイ」。この昂ぶり、解放。じぶんと世界を分かつかなしい輪郭、その境界はいま溶けて、夕日のひかり、あのどこまでものびる赤いうでの勢いで、かれらはどこまでも飛散し、拡大し、羽ばたいてゆくのである。「夕日というのは人をなにかの空間にさそいこむ。」とこどもが語るとおり、夕日はわたしたちに特殊な空間として、あるいはそこにひき込む力として作用するようである。

…

「まるで神様のようにやさしくひかっている夕日を毎日かかさずみたいと思います。」

…

「夕日は、人を美しい心にさせたり、人をヤル気をおこさせたりする神様の化身なんじゃないかなぁと思います。」

…

「まるで神様のようにやさしくひかっている夕日」。夕日はまた超越的な存在としてわたしたちの前にあらわれる。それはわたしたちを見守り、ほほえみ、うなずいて、なでてくれる。「神様の化身」ではないかと思えるほど、それは母性にあふれ、か

ぎりなくやさしい存在なのである。

…

「そのとき夕日を見ると、なにかとってもやさしいおかあさんのように、ぼくを見守っているように感じた。そして何かとっても明るくあったかいようなものをかんじて、何かほほえんでしまった。そしてつかれたし、夕日があっておかあさんのようにあったかいので30分くらいねてしまった。」

…

「わたしは夕日が大すきです。なぜかというと、もしもつかれていたら夕日でねむることができるからです。」

…

こどもたちは「夕日でねむる」。「何かとっても明るくあったかいようなもの」につつまれて、もう誰のことも恨まず、じぶんのことさえすっかり受けいれて、まっさらな眠りへとしずんでゆくのである。まるで「おかあさんのよう」な夕日の包容力。たとえつかれたり落ち込んだりしても、そこに身をうずめてしまえばもう安心。朝にはかならず元気になって、おおきな声で「お早う！」とあいさつできるのである。

…

「夕日は、私の友だと思う。友というのはなんだろう？　どこにでもいるやさしい心。帰ってみたい日もあったりする。私は自信をつけようかとも、夕日をみると思う。…略…私はけっして一人ぼっちじゃないと、夕日をみて思うのです。」

…

「夕日はぼくらの友達だ。ずっとずっと昔から長い長い年月を経て……。」

…

夕日はまた「ぼくらの友達」である。「どこにでもいるやさしい心」、「ずっとずっと昔から長い年月を経て」。それはひとりひとりの内密のうちに現れる、人類に普遍の友である。わたしたちは夕日に語りかけ、その声を聴き、「自信」をあたえられ、こころしずかに還されてゆくのだ。孤独の淵には夕日がいる。こどもたちはそれを知っているから、「けっして一人ぼっちじゃない」と心づよく生きてゆくことができるのだ。

…

「わたしはゆうひをみると、小さいときのことを思い出します。」

…

「夕日を見ると私は死んでしまったインコの顔を思い出します。」

…

「夕日を見ると、田舎のおばあさんやおじいさん、いとこたちのことを思い出す。そして、そばにおじいさんとおばあさんが立っているようだ。夕やけはぼくのおじいさんみたいだ。」

…

夕日をみると、「思い出す」。夕日はとおい記憶をよぶのだと、こどもたちは書きつけている。「小さいときのこと」、とおくへ越していった友のこと、「田舎のおばあさんやおじいさん、いとこたちにこと」、いまはもうこの世にいないかわいい「インコ」のこと。夕日はつまり、別れてきてしまったもの、過ぎ去ってしまったもの、置いてきてしまったもの、手をはなしてしまったものを、記憶の淵から「いま」に呼びよせる。記憶の池、その赤く濡れてゆらめく水面に、とおくへだたったものの俤をよせ、映す。わたしたちはそこで遠ざかったものの印影とあらためて手をむすび、胸にとめ、前をむいて生きてゆくのである。

「夕日はぼくのおじいさんみたいだ。」とこどもが語るとき、それは同時に彼の記憶をつきぬけた、人類の祖父とでもいうべきものを云わんとしているのではないだろうか。その俤から注がれる眼差しはあたたかく、「永遠からの」とでもいうべきものである。まるで「そばにおじいさんとおばあさんが立っているよう」に、夕日はわたしたちに寄り添って、見守っていてくれる。

…

「夕日は思いださせてくれるまほうのかがみだ。」

…

「夕日を見ると自分の一生と、過去が見えて来るように感じます。…略…自分の鏡だと思います。」

…

夕日は映す。その力をこどもたちは「かがみ」であると書いている。燃える水面。そこに「自分の一生と、過去が見えて来るよう」におもう。夕日は未来さえ映そうとしているというのだ。それはおそらくヴィジョンではなく、予感である。いま歩む道の先、そこに生じるであろう数々のこと。それが透けてみえるように感じる。そのかすかな、しかし胸をつきあげるような予感は、ねがいや祈りとともに、

わたしたちの人生を照らし、導いてゆくのである。

…

「夕日を見ていると心がしずかになり、ぼーっとしてしまう。なぜかというと気持ちがいいからです。見ていればしずーかなきもちになってきます。」

…

「わたしたちは、つらいときは夕日を見て、きげんをなおすことです。けんか、くるしみもあります。それを夕日とかんけいにすれば、きっとそうゆうものをなくしますね。でも、きげんがなおせないのなら、あくしゅも、なにもできないのなら、あやまって、夕日をみましょうね。夕日はきれいにきえていくんだ。」

…

授かり物ののように美しいことば。まるで夕日の声をじかに聴いているようである。こどもの聡さは、ゆだねることを知っているということだろう。

毬栗のんだような夕方、もう誰の顔もみたくないような帰り道。じぶんを葬ってしまいたいようなくるしみの時、「それを夕日とかんけいにすれば、きっとそうゆうものをなくしますね。」とこどもはいう。それでも固いつかえがのこるなら、「あやまって、夕日をみましょうね」。屑かごばらまいたように混乱してわだかまる心。それさえ夕日はだきとってくれる。とかし、もして、「夕日はきれいにきえていく」。その浄化のちからにゆだねること。こどもの知恵はすばらしいものである。

…

「わたしは、夕やけの中でみんなとあるけたらいいだろうな。一度だけでもともだちぜんいんで手をつないでいっしょに歌をうたいたいな。そうしたらとってもうれしくて、からすといっしょにうたをうたってみたいな。そしていっしょにかえりたいです。とてもうれしくて、目の中からなみだがでそうなかんじになってくるかもしれない。」

…

「みんな」、「ぜんいんで」、「いっしょに」。「からす」さえ「いっしょに」、「うたをうたいたい」。そして「いっしょにかえりたい」。このことばを読んでいると、わたしの心はふしぎとひとつの曼荼羅をおもいだす。それは『死者の書』の郎女が、伝説の中将姫が、蓮糸で織りあげたという、当麻曼荼羅である。

「今日も尚、高田の町から西に向つて、当麻の村へ行くとすれば、日没の頃を択ぶがよい。」[1]という折口のことばに従い、ちょうど日が二上山の両峰の間にはいろうとするころに当麻寺を詣でたことがあった。本堂に坐し、蓮糸曼荼羅をみつめながら、わたしはしずむ日を想っていた。そのときどういうわけか、「ああ、これは夕日の光景なのだ。」とわかった。もちろんそれは『死者の書』や中将姫伝説を通してすでに知っていたことではあったのだが、そのときそれが降るように分かったのだ。夕日のひかり、この世に渡ってくるその光のさなかに布を垂らし、その切断面を布に映したとしたら、そこにあらわれるのがこの曼荼羅なのだ。それはこんなにも全き世界。それは欠けたもの、断ち切られたもののひとつとしてない世界。完全な調和と対称の世界。癒された世界だ。昼間の白いひかりがはっきりと切り分けていったもの。わたしとあなた、その溝、隔たり、わだかまり。人と動物、人と植物、死者と生者。かつてといまと、いまこれから。分断につぐ分断、孤独な世界。そこに夕日は渡ってくるのである。まったく別のひかりとして。その光は世界をふたたび結びつける。こなごなのいのちを円かにする。「ともだちぜんいんで手をつないでいっしょに歌をうたいたいな」、「そしていっしょに帰りたいです」。あらゆる種と属性をこえて。そんなわたしたちの夢、あたたかいイマージュを、夕日はわたしたちにみせてくれるのである。

中沢新一は「マイナー・フォークロア」の構造についての考察をしめす中で、「いっさいが玉虫色に変化をおこす境界の領域が人間の意識に開かれてくるためには、ルイス・キャロルの鏡とか、魔法の扉とか蝶番などが必要だ。」[2]と語っている。こどもたちのことばは、夕日がまさにその「境界領域を開く、象徴の蝶番」としてわたしたちに作用するものであることを、はっきりと教えてくれている。

こどもの『死者の書』。原初の夕日へと導かれた旅のはてに、わたしたちはようやくこどもたちと声をそろえて言うことができる。

…

「だからぼくはいつも夕日が来るのを待っている。いつもいつも待っている。」

…

---

[1] 折口信夫(1974)『死者の書』中央公論社、p.95

[2] 中沢新一(1992)『森のバロック』せりか書房、p.203

3、赤いひかり、赤い力ーEpilogue

生命の基層をみつめる教育学は、生死の転換をみつめる学、すなわち蘇生の学である。その両てのひらが掬おうとする底水に、夕日がうつくしく映えていた。その赤いひかり、赤い力。夕日をめぐるこのちいさなお話も、そろそろとじてゆきたいとおもう。原初の夕日をうつくしく謳う詩とともに、日没のようにゆっくりと。

夕ぐれの時はよい時、
かぎりなくやさしいひと時。

それは季節にかかはらぬ、
冬なれば煖炉のかたはら、
夏なれば大樹の木かげ、
それはいつも神秘に満ち、
それはいつも人の心を誘ふ、
それは人の心が、
ときに、しばしば、
静寂を愛することを
知つてゐるもののやうに、
小声にささやき、小声にかたる……

夕ぐれの時はよい時、
かぎりなくやさしいひと時。

若さにほふ人々の為めには、
それは愛撫に満ちたひと時、
それはやさしさに溢れたひと時、
それは希望でいつぱいなひと時、
また青春の夢とほく
失ひはてた人々の為めには、
それはやさしい思ひ出のひと時、
それは過ぎ去つた夢の酩酊、
それは今日の心には痛いけれど、
しかも全く忘れかねた
そのかみの日のなつかしい移り香。

夕ぐれの時はよい時、
かぎりなくやさしいひと時。　…後略…[1]

西からさしこむ赤いひかり、赤い力。それは死のたま、しまいの火。生死はここに頂点となり、せかいはみなぎり、みちて終わる。それはまた受胎の火。ゆっくりと降る巨きなたましい。大地は赤子を授かって、ほんのり上気し、しずかにふくらむ。やがておとずれるやさしい闇。だれもがじっと、あすを身ごもる夜である。またそれは蘇生の火。過去とむすばれ、交じりあうひととき。かつてのいのち、すべてのいのちはひとつの巨きな火となって、燃えまた落ち、「いま」に宿る。

ゆらゆらと、くるめきおちる、日のひかり。それを受けとるひとびとは「かぎりなくやさしいひと時」へといざなわれ、ふっくらまどかに蘇る。そこはみなにあたえられたなつかしいふるさと。けっして損なわれることのない存在のよるべ。夕ぐれの空をみつめ、そこに立ちかえることを知るひとは、孤独のうちにつながりをとりもどし、いくどでもすこやかに蘇ってゆくことができる。

いにしえから伝えられたこのたいせつな知恵、古びることのない生命の知恵を、奪わずそこなわず持ち伝えてゆく教育。それをこそわたしたちはつくってゆきたい。どうかすべて育ちゆくいのちが、夕日のもとに憩う知恵をもち、穏やかなこころとともに元気に暮らしてゆけますように。

【参考文献】

井戸尻考古館編(2006)『井戸尻第8集』鬼灯書籍
上原輝男編著(1993)『いのちの教育を再び～基層教育学試論集～』明治図書
折口信夫(1968)『折口信夫全集・第二十七巻』中央公論社
折口信夫(1974)『死者の書』中央公論社
児童の言語生態研究会(1998)『児童の言語生態研究No.13特集・子どもの泣き』
谷内六郎著・横尾忠則編(1981)『谷内六郎絵本歳時記』新潮社
谷内六郎(1982)『谷内六郎絵本歳時記　冬・新年』新潮社
中沢新一(1992)『森のバロック』せりか書房
中沢新一(2008)『古代から来た未来人　折口信夫』筑摩書房
堀口大學(1980)『現代詩文庫1019堀口大學』思潮社

[1] 堀口大學(1980)『現代詩文庫1019堀口大學』思潮社、pp.16-17